

台湾道教の縊死者および溺死者救済儀礼に関する二、三の考察

—台南地域を例として—

Some Consideration on the Daoist Salvation Rituals for the Deceased who Died by Hanging Himself and the Drowned Persons

— Those in Tainan Region Given as examples —

山田 明広

Akihiro Yamada

一、はじめに

筆者は、ここ数年、台湾を中心に現地調査と文献読解を組み合わせた方法により、道教儀礼、特に道教の死者救済儀礼の研究を行っている。道教の死者救済儀礼は、現在の台湾では、「斎」「功德」「做功德」などと称され、規模によりその数は異なるが、数個から数十個の儀式により構成されている⁽¹⁾。そして、同規模の功德儀礼ならば、それを構成する儀式の種類や順番はある程度固定化されている。ただ、救済の対象である亡魂が難産死や溺死、縊死などといった異常と認められるような死因により死亡した場合には、通常死の場合には見られない特殊な儀式あるいは特殊な功德儀礼を行う必要が生じる。

台湾の中でも道教儀礼が特に盛んに行われている台南地域に目を向けると、同地域では、縊死者が出た場合には「抽楹放索」と呼ばれる儀式が、溺死者が出た場合には「転水轆」と呼ばれる儀式が、このような死者を救済すべく特別に行われる。そして、これらの儀式は、多くの場合、このような死者が発生した現場で行われる。

本稿では、まず、これら「抽楹放索」および「転水轆」といった儀式について、筆者が台南地域にて実際に調査した事例にもとづきつつその様子を描写することで、それぞれいかなるものであるのか概観し、その後、これらの儀式がなぜ縊死や溺死が発生した現場で行われているのかということを中心にこれらの儀式に関していくらか考察を加えてみたい。

二、台南地域の道教の縊死者および溺死者救済儀礼

1、縊死者救済儀礼「抽楹放索」

まず、台南地域において縊死者が出た場合に行われる「抽楹放索」について見てみたい。ここでは、筆者が2010年8月18日～21日に台南市東区関帝殿にて調査した四日間の無上黄籙・玉籙拔度大斎功德（鍾旭武道長主宰）において行われた「抽楹放索科儀」〔以下、事例①とする〕に基づきつつ、抽楹放索とはいかなるものであるのか見て

⁽¹⁾ 台湾道教の功德儀礼については、浅野春二『飛翔天界 道士の技法』（春秋社、2003年）、同「斎の種類と程序」（浅野春二『台湾における道教儀礼の研究』、笠間叢書、2005年、第二章第三節）、丸山宏「台南道教の功德儀礼」（丸山宏『道教儀礼文書の歴史的研究』、汲古書院、2004年、第二部第四章）および拙稿「道教の功德儀礼の科儀について—台南市の一朝宿啓の功德を例として—」（拙稿『道教斎儀の研究』、大河書房、2015年、第二部第三章）等参照。



写真①：吊客山



写真②：塩米を撒き悪煞を駆逐する様子

みたい。

まず、鍾道長が卓上の救苦献状（救苦天尊の神位）に対して礼拝した後、卓上の香炉に香を挿す。次に、金古紙を燃し帝鐘（法具としての鈴）を鳴らしながら噴水し、その後、手に龍角を持ち帝鐘を鳴らしながら舞うことで、東→南→西→北→中の順に五斗星君および五方五徳星君を召請する。その際、各方向の星君を召請するたびに、礼拝して上香する。次に、二吊鬼という悪煞を、壇堂→壇→壇門へと順に至るよう三度に渡り召請する。さらに、五斗星君を召請するのと同様の所作により、上・中・下界の各直符使者を召請する。次に、「半歩虚⁽²⁾」を歌い、さらに「浄壇呪⁽³⁾」を歌いつつ浄水を撒くことで、祭壇を浄化する。そして、鶏の鶏冠を切って採取した血を「吊客山」（亡魂が二吊鬼に首つり状態で捕われている様子を表した紙製品）〔写真①〕に塗りつけることで、吊客山の開光を行う。その後、道教の高位の神々から凶神悪煞に至るまでが祭壇へと来臨するよう上啓し、請来した神々に対して三度に渡り献酒を行う。そして、「手上疏文」（功德疏文⁽⁴⁾）を読み上げ、神々に対して拝謝する。その後、「化紙呪⁽⁵⁾」を唱いながら祭壇および吊客山に浄水を撒き、祭壇全体を浄化する。次に、金古紙に火をつけて宝戟（矛のような法具）にかざすことで宝戟を浄化し、そして、その宝戟を手に執り「五傷悲⁽⁶⁾」を歌いながら吊客山の周りを旋廻する。その後、鍾道長が「道童、助我三通法鼓、倩破吊客山（道童よ、我が法鼓を三回鳴らし、吊客山を打破するのに助力せよ）」と述べて宝戟の先で吊客山に触れて揺らし、補助の者らとともに吊客山上の替身の首に掛けられている縄を解き、さらに吊されている吊客山自体を地面へと下ろす。続いて、鍾道長が箒に取り付けた金古紙に火を付け、その箒で周囲の地面を数回叩き、さらに、莫藎を巻いて両端に金古紙を付けたものを手に執って両端の金古紙に火を点けて胸の前で円を描く様に回してから、その莫藎を巻いたものを用いて箒の場合と同様に周囲の地面を数回叩く。最後に、「送塩米呪⁽⁷⁾」を唱えながら周囲に塩米を撒き、これにより二吊鬼など

(2) ここで歌われる内容は「超度三界難、地獄五苦解、悉歸太上經、静念稽首禮」となる。これは「三啓頌第三の後半部分」に当たり、現行『道蔵』の中では『玉音法事』（『道蔵』SN607）巻上、12 a 10-12 b 9、および巻下、29 b 2-29 b 3などに見られる。

(3) ここで歌われる内容は「琳琅振響、十方肅清、河海静默、山獄吞煙、萬靈振伏、招集郡仙、天無氛穢、地無祇塵、冥慧洞清、大量玄玄也、十方肅清天尊」となる。現行『道蔵』中に収蔵されている諸経の中でも首経である『靈寶無量度人上品妙経』（『道蔵』SN1）には、同様の記述が度々見られる。

(4) 功德儀礼を行う目的や日時、亡魂および遺族の名、功德儀礼のプログラムなどが記された文書のこと。儀式を行う際には、常に科儀卓上に置かれる。

(5) 「化神呪」の内容については、大淵忍爾『中国人の宗教儀礼 仏教・道教・民間信仰』（福武書店、1983年）、706頁参照。

(6) 「五悲傷」の内容については、大淵忍爾前掲書、709頁参照。

(7) 鍾旭武道長が使用していた科儀書によれば、ここで唱えられる「送塩米呪」の内容は、「一送凶神出外煞、二送凶神出外廳、三送凶神出外庭、四送凶神不再回」となる。

の悪煞を駆逐して〔写真②〕、儀式終了となる。

2、溺死者救済儀礼「転水轆」

次に、台南地域において水死者が出た場合に行われる「転水轆」について見てみたい。「転水轆」とは、写真③のような円柱状の「轆」を用いて水湖地獄に堕ちた亡魂を救済する儀式のことである。この轆は中心に軸が通っており、儀式の際には道士や遺族がこの軸を中心に轆を何度も回転させる。轆の中には紙製の替身（亡魂の替わりとなるもの）を入れるが、この替身に救い出した亡魂が付くとされる。台南地域の転水轆においては、普通、このような轆が五機使用され、それぞれ東北・東南・西南・西北・中央の五方を象徴しており、すべて白色の場合〔写真③〕もあれば、緑・白・赤・黒・黄の五色の場合〔写真④〕もある。ここでは、筆者が2009年9月5日に高雄縣甲仙郷にて調査した無上金書拔度淨斎功德（林清隆道長主宰）において行われた無上水轆五苦神燈科儀^{〔8〕}〔以下、事例②とする〕に基づいて、転水轆とはいかなるものであるか見てみたい。



写真③：白色の水轆



写真④：五色の水轆

まず、遺族が水轆に向って上香し、三跪九拝する。次に、高功^{〔9〕}を務める林道長を中心に、鶏の鶏冠を切って採取した血を水轆に塗りつけ、その後、龍角を吹きつつ火を点けた金古紙を水轆にかざしていくことで、水轆の開光を行う。次に、林道長が水轆の手前にある黒水を入れた盥の前にて「北帝追魂撰魄飛符」（儀礼文書の一種）を宣読する。その時、都講と副講が水轆の後ろで帝鐘を鳴らしつつ龍角を吹く。符命を宣読し終わると「催牒」（儀礼文書の一種）とともに焚化し、黒水^{〔10〕}を張った盥の中にその灰を入れる。黒水は水湖地獄を象徴しており、これによって亡魂を探し出す役目を担う追魂大使や神虎原承差官などの神々を水湖地獄へと送ったことになる。次に、

〔8〕 本事例は高雄縣甲仙郷における調査事例ではあるが、この時に儀式を主宰した林清隆道長は台南市在住で、その実施法も台南地域の方法に従って行われたため、ここでは、台南地域の事例に分類した。また、本事例の「無上水轆五苦神燈科儀」は、大淵忍爾前掲書、629～634頁に掲載されているものとはほぼ同様のものである。

〔9〕 儀式における道士の役割を表す名称。「高功」は儀式を中心に行う道士のことで、主要な科儀においては道長を務めるが、それ以外では必ずしも道長が務めるとは限らない。それ以外の「都講」は儀礼全体の調整に、「副講」は疏文の管理に、「引班」は道士団の先導役および斎主の世話役に、「侍香」は香や灯の管理に当たる。また、儀式を行う際には、役割に応じてそれぞれ立ち位置が決まっており、「高功」は真ん中に、「都講」はその左隣に、「副講」は右隣に、「引班」は「都講」の左隣に、「侍香」は「副講」の右隣に立ち儀式を行う。大淵忍爾前掲書、200-201頁参照。

〔10〕 この儀礼において使用された科儀書では、水府のうちの第一水池について述べた部分に「湖水皆是黒水」とある。大淵忍爾前掲書、631頁。この黒水の中には黒水で湿らされた白布の一端が浸されており、白布のもう一端は中央の轆の下部にまで敷かれていて、轆と水湖地獄はつながられている。亡魂はこの白布を通して水湖地獄から轆内へと登っていく。亡魂が水死した現場で行う場合は、白布の一端に黒水を張った盥などを設けずに現場の川や海などに直接浸す。

道士らが「歩虚⁽¹¹⁾」を合唱し、高功が献香する。この時、遺族のうちの担当の者が轎を回し始め、時折、各轎の傍にある水鉢の中の黒水を柄杓ですくい上げてその隣にある竹簾にかける。この竹簾は亡魂が水湖地獄から攀じ登って来るのに供するものである。次に、道士らが「浄壇呪⁽¹²⁾」を合唱し、都講⁽¹³⁾が浄水を撒くことで、祭壇を浄化する。そして、関係する神々に対して高位の者から低位の者へと順に祭壇へと来臨するよう請願するとともに、三度献酒する。その後、副講⁽¹⁴⁾が「手上疏文」を読み上げ、林道長が太一救苦天尊および雷声普化天尊を讃え、他の道士らはそれらの天尊の名を称念する。これが終わると、道士らは全員椅子に座る。次に、林道長が経文を読む中、都講が「五方符命」（文書的一种）のうちのまず東北方のものを読み上げて燃やし、その後、別の道士が轎の前へと出向き道幡（招魂用の幡）を何度か振って亡魂を導く〔写真⑤〕。そして、この一連の動作を東北→東南→西南→西北→中央の順に繰り返し五度行うことで、水湖地獄の五方各方にいる主者たちに亡魂を水湖地獄から解放させ壇へと赴かせるよう命じる。次に、道士ら全員で太乙救苦天尊を始めとする天尊の名を称念してから立ち上がり、手に道幡を持った林道長を先頭に「五悲傷」を歌いながら一列になって轎の周りを廻る。これにより、さらなる引魂を行う。そして、高功が徐甲真人へと変身して護衛の兵将である五營軍兵を召出することで、亡魂を祭壇へと迎える環境を整える。この後、遺族の代表が轎の前で筭（神や亡魂の意志を問う道具）を投げることで、対象の亡魂が救出されたかどうかを確認する。そして、それが終わると、魂船（紙製の小型の船）に轎中の替身を乗せ、道士の一人がその魂船を引きつつ轎の周囲を廻る〔写真⑥〕。これにより、救い出した亡魂を祭壇へと導くのである。その後、道士らが「咳嚕嗦（ハイロソー）」と唱える中、魂船を霊堂（位牌を置いてある所）まで引いてゆき、紙銭とともに魂船および替身を燃やす。そして、道士の一人が、まず五機の水轎を七星剣にて叩き、続いて莫蔭を巻いて両端に金古紙を付けたものを手に執って両端の金古紙に火を点け胸の前で円を描く様に回し、それから、その莫蔭を巻いたものを用いて水轎を叩き倒すとともにさらに水轎の周囲および水轎そのものを叩く。最後に、塩米



写真⑤：道幡による引魂



写真⑥：魂船を引いて水車轎の周囲を廻る様子

(11) ここで歌われる内容は、「大道洞玄虚、有念無不啓、煉質登仙眞、隨成金剛、超度三界難、地獄五苦解、悉歸太上經、靜念稽首禮」となる。これは「三啓頌第三」と称されるもので、現行『道蔵』の中では、『玉音法事』（『道蔵』SN607）巻上、12 a-12 b、および巻下、29 b などに見られる。

(12) ここでは、注に示したものと同一内容のものが歌われた。

(12) 儀式における道士の役割を表す名称。注9 参照。

(13) 儀式における道士の役割を表す名称。注9 参照。

を水轆に向けて数回撒いて悪煞を祓い、儀式終了となる。

三、考察

ここまで、筆者が調査した事例を用いて、台南地域において縊死者が出た場合に行われる抽櫓放索と溺死者が出た場合に行われる転水轆についてその具体像を見てきたが、これらの儀式はすでに前述してあるように、基本的には縊死あるいは溺死が発生した現場で行うべきであると言われる。特に、抽櫓放索については、必ずと言っていいほど縊死が発生した現場で行うべきであるとされている。前述の抽櫓放索および転水轆の事例はいずれも多数の亡魂を救済の対象とする法会の中で行われたものであるため、このような死者が発生した現場では行われなかったが、例えば、筆者が2005年11月30日に高雄縣大樹郷にて調査した午夜功德（劉雅弘道長主宰）の中で行われた「絞台放索」は、その救済の対象である亡者が自宅の階段上の梁の部分に縄を掛けて首を吊って亡くなったため、その現場である自宅内の階段前で行われた。この事例では、儀式の最後に、現場にあった階段の手すりなどをすべて取り外して処分するといったことも行われた。また、筆者が高雄縣永安郷にて2004年8月9日～10日に調査した無上十廻拔度大齋功德において行われた転水轆科儀も、その救済の対象である亡者は自宅近くの養魚池にて溺死したため、その現場前で行われた。

それでは、なぜ、これらの儀式は縊死や溺死が発生した現場で行う必要があるのでしょうか。まず、抽櫓放索については、事例①で使用された科儀書の内容および事例①を主宰した鍾旭武道長に対して行った聞き取り調査によると、二吊鬼をはじめとする悪煞の祟りが原因となって縊死者が生じたと考えられているようであり、したがって、この悪煞を駆逐して今後同様の死者が新たに生じないようにするためであると考えられる。また、鍾旭武道長によれば、亡魂が二吊鬼により首吊り状態で捉えられている場所である吊客山は、陰間（地獄）ではなく、陽間（この世）の縊死が生じた現場にあるとのことであり、したがって、亡魂の首に懸っている縄を解いて亡魂を首吊りという束縛状態から逃れさせるためであるとも考えられる。一方、転水轆については、事例②で使用された科儀書には悪煞の祟りにより溺死が生じるといった類の記述は見られず⁽¹⁵⁾、なぜ溺死が生じた現場で当該儀式を行う必要があるのか、その理由となるものが見当たらない。そもそも、転水轆は、溺死して水府にある水湖獄に囚禁されてしまった亡魂を救出することがその主な目的となっており、基本的に水湖獄が舞台となっているため、当該儀式と溺死が生じた現場との直接的なつながりは見られない。

このような「抽櫓放索や転水轆は、縊死あるいは溺死が発生した現場で行うべきである」と言われるその背景には、おそらく、民間でよく言われ、小説などといった古典文献にもよく見られる「鬼求代」という考え方が大きく影響していると思われる。「鬼求代」とは、縊死や溺死など異常死を遂げた亡魂は縊鬼や水鬼などとなってその場に留まり、替わりの縊死者や溺死者を見つけるまでは往生できないというものであるが、このような考え方はかなり古くから存在していたようで、例えば、『太平御覧』巻七六六には南朝宋・劉義慶の『幽明録』を引いて次のようにある⁽¹⁶⁾。

曲阿に一人有り、姓名を忘る。京より還るに、暮に逼るも家に至るを得ず。雨に遇ひ、廣屋中に宿る。雨止み

⁽¹⁵⁾ 事例②で使用された科儀書には、「或多生造罪、曩劫爲愆、魂入水府、魄歸陰曹」などとあることから、当該儀式においては、溺死が生じた原因は、悪煞の祟りではなく、前世に犯した数々の罪であると考えられているようである。

⁽¹⁶⁾ 曲阿有一人、忘姓名。從京還、逼暮不得至家。遇雨、宿廣屋中。雨止月朗、遙見一女子、來至屋簷下。便有悲歎之音、乃解腰中絙繩、懸屋角自絞。又覺屋簷上如有人牽繩絞。此人密以刀斫絙繩、又斫屋上、見一鬼西走。向曙、女氣方蘇、能語、家在前。持此人將歸、向女父母說其事。或是天運使然、因以女嫁與爲妻。

月朗らかなれば、遙かに一女子の來りて屋簷の下に至るを見る。便ち悲歎の音有りて、乃ち腰中の縋繩を解き、屋の角に懸けて自ら絞す。又た屋簷の上に人の繩を牽き絞る有るがごときを覺ゆ。此の人密かに刀を以て縋繩を斫り、又た屋上に斫れば、一鬼の西走するを見る。曙に向かひ、女の氣方に蘇せんとし、能く語る、家、前に在り、と。此の人の將に歸らんとするを持し、女の父母に向かひて其の事を説く。或いは是れ天運の然らしめば、因りて女を以て嫁ぎ妻と爲らしむ。

これは、屋根の軒上にいる鬼が女を自らの代わりとして捉え、軒下で自縊させようとしたという話で、六朝時代の縊鬼の例であるが、このように遅くとも六朝時代にはすでに縊鬼が代わりの者を求めて縊死させるといった考え方が存在していたようである。水鬼が現れる比較的古い例としては、『太平広記』卷三五二に北宋・孫光憲の『北夢瑣言』を引いて次のようにある⁽¹⁷⁾。

江河の邊りは佹鬼多く、往往にして人の姓名を呼び、之に應ずる者必ず溺る、乃ち死魂者の之を誘ふなり。

縊鬼や水鬼が現れ代わりを求めるといった話は、中国の古典文献にはこのほかにも数多く見られ、枚挙に暇がないほどである⁽¹⁸⁾。このような中華圏に非常に古くから存在する「鬼求代」という考え方に基づけば、亡者が縊死や溺死したその原因は縊鬼や水鬼が代わりとして亡者を捉えたことにあるとすることができ、亡者が新たに縊鬼や水鬼となって往生できずに苦しむのを、さらには今後同様の縊死者や溺死者がこれ以上生じるのを防ぐために、抽櫓放索や転水轆は縊死や溺死が発生した現場で行うべきであるとされていると考えられる。

四、結びにかえて―「二吊鬼」と「縊鬼」の関係性について―

以上、台南地域の道教の縊死者救済儀礼である「抽櫓放索」および溺死者救済儀礼である「転水轆」について、それぞれいかなるものであるのか概観するとともに、これらの儀式がなぜ縊死や溺死が発生した現場で行うべきとされているのか少しく考察した。そして、後者については、現在使用されている科儀書には見られないものの、中華圏の民間において非常に古くから存在する「鬼求代」という考え方が大きく影響しているのではないかという結論に達した。

ただ、このように考えると、抽櫓放索で縊死を引き起こす原因とされ、また縊死した亡魂を陽間にて吊客山に縛り付けている「二吊鬼」という悪煞は、結局は「縊鬼」のことを指すのではないかと考えられる。この点について、事例①の抽櫓放索を主宰した鍾旭武道長の説明に依れば、「二吊鬼」は流年太歳などと同様、人に悪い運氣をもたらす凶神（邪神）であるが、「縊鬼」は人鬼（亡霊）であるため、全く別物であるという。この「縊鬼」については、確かに事例①で使用された科儀書においてはそれに関する記述は見られないものの、一方で、道教の歴史的儀礼文献に目を向けると、例えば、北宋・林靈素編『高上神霄玉清真王紫書大法』（『道藏』SN.1219）卷七・捉邪靈官部には、「三界都統急捉金刀靈官楊從廣。右の法、金を招み刀印して、辰炁もて符を書し、呪を念じて符を焼く。呼びて云ふ、靈官楊從廣、從官一百二十人よ、吾とともに前に去り、火急に自縊鬼を解き下し、意に入らしめ

⁽¹⁷⁾ 江河邊多佹鬼、往往呼人姓名、應之者必溺、乃死魂者誘之也。

⁽¹⁸⁾ 澤田瑞穂『鬼趣談義 中国幽鬼の世界』（中央公論社中公文庫、1998年）、153～203頁参照。

⁽¹⁹⁾ 三界都統急捉金刀靈官楊從廣。右法、招金刀印、辰炁書符、念呪、焼符。呼云、靈官楊從廣、從官一百二十人、與吾前去、火急解下自縊鬼、入意。疾。

よ。疾ならん⁽¹⁹⁾」とあるなど、関連する記述が見られ、しかも、駆逐の対象となっているようである。もしかすると、「縊鬼」はもともとは民間だけでなく道教においても駆逐の対象となっていたが、しかし、「縊鬼」は飽くまでも縊死した人の亡魂であり、救済すべき対象でもあるので、したがって、「縊鬼」から「二吊鬼」へと、すなわち、亡魂から悪煞へと変化したのでないかと筆者は考える。この「二吊鬼」と「縊鬼」の関係性については、まだまだ不明瞭な点が多く、ここであまり根拠のない論を展開するわけにもいけないので、この点についての議論はここのまですべてとして、今後の課題としたい。